

セーリング競技選手の競技パフォーマンス要因に関する意識

1714038 望月 滉 (海洋スポーツ・健康科学研究室)

I. 研究の目的

セーリング競技におけるディンギーのレガッタは、自然環境を背景に実施されるため、刻々と変化する波や風に合わせてセールの変え揚力を生じさせ、推進力に変える技術やボートスピードが必要である。榮樂(2006)は、セーリング競技選手及びコーチを対象として聞き取り調査を実施することにより、セーリング競技における競技パフォーマンスの構造化を行った。本研究では、競技中における選手の競技パフォーマンス要因に関する意識を時系列に明らかにすることを目的とした。

II. 研究の方法

目的を達成するために、4つの風域(微風、中風、順風、強風)において、調査対象者が意識する競技パフォーマンス要因について、レガッタの1レース目の陸上待機の状態からスタート直後までの時系列に分けて質問紙調査と聞き取り調査を実施した。調査対象者は、セーリング競技経験者20名であり、対象者が出場したことのある大会レベル [関東学生ヨット選手権大会予選にのみ出場経験がある選手(Dグループ)、関東学生ヨット選手権大会決勝まで出場経験がある選手(Cグループ)、全日本学生ヨット選手権大会に出場経験がある選手(Bグループ)、全日本学生ヨット選手権大会入賞経験者あるいは全日本スナイプ・470選手権大会の入賞経験者(Aグループ)]によって区分し、それぞれ5名ずつとした。インタビュー調査の分析においては、対象者の考えや意識についての発話を、一般化した概念として扱うことが可能な質的データ分析手法であるSCAT (Steps for Coding and Theorization) を用いた。

III. 結果と考察

得られた回答を集計した結果、DグループはAグループに比べて、スタートするポジションを決める際にカバーリングを意識していることがわかった。また、Aグループは他のグループに比べ、海上に出た後からレース海面に到着するまで高い割合(75%)でチューニングを意識しており、スタート時のポジションニングをする際に他艇を意識する必要がないことが把握できた。

IV. おわりに

本研究を通して、競技の局面が進行する中で選手がどのような意識を持ってセーリング競技を行っているのかを明らかにしたが、調査においては、競技パフォーマンス要因のうちの1つを選ぶことが困難な選手が多かった。これは、レースの様々な局面で、他艇の位置、自然環境、海象が常に変化して様々な要因を考慮しなければならないことを示していると考えられた。

主な参考文献

榮樂洋光：セーリング競技における競技パフォーマンスの構造化，鹿屋体育大学大学院修士論文，2006.